

『お寺の学校』 宗教の時間

お浄土 何一つ無駄にならない世界

■「いのち」への気づき

『阿弥陀経』には、お浄土に白鵠^{びゃっこう}、孔雀^{くじゃく}、鸚鵡^{おうむ}、舍利^{しゃり}、迦陵^{かりょう}、頻伽^{びんが}、共命鳥^{ぐみょうちよう}という鳥がいて、昼夜六時^{ちゅうやろくじ}にきれいな声で鳴いて仏の法を伝えたと説かれています。その中の共命鳥の話をしてしましょう。

共命鳥は双頭一身（頭は二つで身体は一つ）の鳥です。片方の頭はカルダ、もう片方をウバカルダといい、一方が死ねば、他方も死んで、命を共にするから、こう名付けられたといわれます。『仏本行集経^{ぶつほんぎょうじつぎょう}』というお経などに説話があり、そこには、ある時、些細^{きさい}なことでウバカルダがカルダに憎しみを抱き、その心がもとでウバカルダが毒を食らい、双頭ともに死んでしまう様子が説かれています。

ところで、皆さんは「SDGs^{エスディージーズ}（持続可能な開発目標）」を知っていますか？ 気候変動や自然破壊、あらゆる争いや貧困、不平等の問題などに、世界規模で取り組んでいこうとする目標のことです。なぜこのような目標を掲げなければいけないのか。その一つには、私たち人間が自己中心的な欲望を満たすため、地球の生命環境を破壊することを省みず^{かえり}経済的発展をめざし、そのしわ寄せを弱者に強いる社会構造を作ってきたからと言えるでしょう。そして、それはもう地球がパンクする、持続不可能寸前まできています。

お釈迦さまが説かれた縁起^{えんぎ}の理法の通り、万物は互いに相依り^{あいよ}、相俟^まって成立し、生存しています。本来、地球は一つの「いのち」なのです。しかし、お互いが支え合い、つながっているにもかかわらず、欲望のおもむくままに振る舞い、いかりや愚かさに流され、他人の命を傷つけているのが、私たちの姿です。そして、その行いは私たち自身を傷つけていることに他ならないのです。

大事なのは、私たちがカルダとウバカルダのようにつながっている「いのち」であるということに気づかされることです。ともすれば傷つけ合うお互いですが、つながりに目覚めれば、だれかの悲しみが私の悲しみに、相手の喜びが自分の喜びに変わっていくことでしょう。困難なことがあっても決して一人ぼっちじゃありません。いかりではなく、手を取り合い共に歩む大切さを、お浄土の鳥は教えているのです。

「2021(令和3)年8月1日(日曜日)本願寺新報」